

報告記

中国訪問記 (第一回)

—主として歴史的分野について—

会員 古藤 田 太

はじめに

今回、大分県自治研センター訪中国の一員として、半月間、北京・濟南・南京・蘇州・上海の各地を廻り、中国の大地に立ち、中国人民に接触し、私なりの歴史観を多少とももつことができた。歴史的中國は古いが、現代中國は未來ある國である。時あたかも日中友好ムードの高まりの中で、一矢を算して、日中友好のよすがとしたい。

(一) 万里の長城

北京の第一日目の見学は、万里の長城から始まった。中国政府は、北京から八達嶺まで凡そ六〇〇キロの鉄道を敷設して、観光客の便宜を及ぼしている。乗客は、国際色豊かなものであった。中でも目を引くのは華僑で、故國の見学に訪れる者が非常に多い。

長城は、かつて人類が地球上に残した最大の築造物で、世界の驚異である。八達嶺の辺りは、海拔八〇〇級の山ななが続いて、谷に降り、あるいは長振を走らせ、東日勤海沿いのぞむ山海関から、河北有八達嶺、寧夏の自治区を経て甘肅省の嘉峪関まで、延々実に六千キロ(総

延長)に亘って築造されている。

登つてみると、修理が間に合わず崩壊を早めており、また僅かな距離を歩いても、傾斜している箇所もあった。秦・漢時代の築城は、版築という工法で、木で固めた中に土を入れて搗き固める方法がとられ、明代になって「レンガ」の量産が可能になると「レンガ」が使用され、継目には漆喰が用いられたが、朔風の山野においては卑弱であった。歴代王朝は、修理を繰返して保存に努めた。特に明朝において、二百年間止むことなく補修が続けられた。現在残っている長城の殆んどは、明代のものである。戦火の中を、兵馬がよくも移動できたものと思ふ程の、急勾配が続いている。

長城には、數百メートルおきに烽火台が造られている。急な階段の二階造りである。下は兵士の詰所で、數十名は築に詰められるほどの大きさがある。二階は烽火台で、芝草や動物の糞を乾燥して燃やしたが、時代が下がるにしたがい硫黄などが用いられ、爆竹も使用されたらしい。底部の中は六、七メートル、上部の中は五、六メートル、余りでその通路は四、五メートル、堂々たる建造物である。このような長城は、外敵に対する防備線、また監視線として、真に重要なものであった。李白の詩の一節は、

万里長城に征戰

匈奴殺戮を以て耕作となす

古来ただみる白骨黄沙の田

というのがある。北方騎馬民族の匈奴のおそろしさをうたつたものである。紀元前五世紀頃から匈奴の南下が始まり、小国燕とか趙とかいった國は、それぞれ匈奴に對する防備線として、現在の長城よりやや規模の小さい防壁を築いて、自國を護ることに専念した。

紀元前二二一年、秦の統一國家ができあがると、これ

までの小園の防壁を繼いでゆき、また補強して、万里の長城ができたものであるが、それは現在の長城の位置よりやや北寄りであったという。最近新た、長城の遺跡の発見を告げる新聞報道があったが、秦の統一国家前の防壁遺跡と考えられ、全く区々別々のものであったようだ。

中国の中世史までは、角度を変えていえず長城史でもある程、長城は貴重な存在であった。想像を絶するこの長城と築かねばならぬ程、北方民族の脅威は漢民族にとつて、拭い難い宿命的なもので、嘗々と築かれていった築城史の分けば、数多くの長城悲話秘められていて、ようて、文学や歌謡などもさまざま姿で、今日まで伝えられている。

長城に登り、はるか彼方から打続く長城の起伏と望めば、中国の歴史の深遠さと思ひあわせて、中国人の勤勉さに、ただ驚くばかりである。

長城の一足坂にあそびつつ
匈奴の賊を想ひみるかな

(二) 地下宮殿

万里の長城見学の帰途、明の十三陵の見学に乗車されることとなつた。

列車を待つていた中国製のバスに乗りこむ。やや堅いクッションだが、どこまでも濃密な並木が続いていて、こよなく楽しい。この心地よさは、人民中国の政治が与てくれるものである。

明の十三陵は、北京の北五十キロほどのところにあるが、陵域は四〇平方キロで、明朝(一三六八—一六四四年)第三代の皇帝から、合計十三名の皇帝の陵墓が、それぞれ山の麓や谷間に修築されて、どの陵墓も一つの明楼、一つの地下宮殿があるとされている。

バスが陵域に近づくと、白い大理石の鳥居が見える。明代、嘉靖十九年(一五四〇年)に建てられたものである。さらに一キロ程行くと、陵域の玄闕大宮門に着く。大宮門をくぐって進むと、碑亭が建てられており、其の前方には、さらに参道が伸びてゆく。

参道の両脇に、数百メートルおきに一對づつの石獸(獅子、象など二十四個)、石人(文官武官十二個)が、拝礼の姿で並んでいる。それらは、白い完全な一枚石で、剛り磨いて作られたものである。

石像群を過ぎると、深緑の松柏におおわれた陵墓があちこちと、遙かに望見された。この陵墓城の広さは先ず驚かされたのである。

私達は、ようやく定陵に到着した。十三陵中、二つだけが見学と許されている。規模の大きい長陵と、陵墓の中でただ一つだけ発掘された定陵である。

定陵は、明朝第十三代皇帝朱翊鈞(一五六一—一六二〇年)の万暦の陵で、万暦帝は十歳の時皇帝に即位したが、明代随一の政治家と認められた張居世に補佐されて、弊政の改革に当つた。しかし張居世が死去すると、忽ち政治を急り、宦官を重用して奢侈にふけた。

この万暦帝(神宗)の頃は、おたかも我が国の室町末期に当る。定陵は、帝の二十二歳の頃から造営にかかり、八年の歳月と、八百万兩の白銀を費やしたものである。

明代は、永樂帝(成祖)の時代は別としても、末期になるに従い、北虜南倭と呼ばれる外患が多く、官僚は腐敗し、特に万暦帝の頃は、豊臣秀吉の朝鮮侵攻や、モンゴル人の降参の反乱などが重なり、財政は窮乏した。そういう時代の皇室だけに、陵墓の豪華さには驚嘆するばかりである。

陵墓は盗掘されるものである。それを防ぐために、墓

の内部を知る者は、殺されたと伝えられる。万曆帝が一六二〇年この陵墓に納まつて、三三〇年後の一七五〇年五月から、一七五八年七月まで現代中国の手によって発掘作業が続けられ、其の全貌を現わした。

この万曆帝の陵墓を「地下宮殿」と呼んでいるが、其の豪華さは驚くべきものがある。

地下宮殿は、地下四階ほどの深さのところにあった。地下に降りる際、踊り場が三分所あった。宮殿は前・中後の三部に分けられ、また左右に配殿が各一個づつある。総て漢白玉の大玉石造りで、通路はアーチ型の高く広い空洞となっている。大きな大理石の扉もあった。その扉を開閉させるための横木は、材木でなく、重さ十斤の銅の梁であった。

部屋の中央に、豪華な白玉製の長椅子が三つ置かれていた。奥の一方は万曆帝のもので、前の二つは、二人の皇后のためのものである。お供物を置く台の前に、五供（蠟台・香爐など）と一つの甕（酒器）があったが、この甕は長明燈と呼ばれ、胡麻油が一杯に注がれ、燈芯がさしこんであつた。

後殿は高く広く、皇帝・皇后の三つのお棺と、二十六个の木箱（副葬品）があつた。金冠・鳳冠はじめ各種の祭振品の一部は、現在は展示室に陳列されている。この後殿が、万曆帝の死後の居室に当るものである。そしてこの宮殿は、誰も見せるためのものでもなく、見ることを刑罰をもって拒絶したものである。

当時の明朝の經常費は、四百万兩といわれたが、その經常費の倍もかけて地下宮殿を造り、土をかけて隠匿してしまふことは、どういふことであらうか。

中国では、ごく近年まで、死後において生存在と同様の、具体的生活があると信ぜられていた。わが國の古

墳時代は、仏教の流布と共に「無」の思想によって消滅した。古墳技術は、朝鮮半島を経て中国から渡来したと信ぜられるのであるが、司馬先生の説のように、墳墓思想のみは濃厚に日本に渡来しなかつたのであらうか。中國の死後世界を信ずる思想が消滅するのは、現代中國が法律をもって火葬を義務づけてからといわれる。

ついでにいへば、私は今回の旅行中、葬儀のことも金めて、死後世界の問題について折にふれては尋ねてみた。死後世界の思想は、少しも知ることができなかった。もはや、新しい中國のもとに変化したものであらうか。燕氏が死去すると、火葬後、追悼会があるだけで、遺骨は主として火葬場に置かれるが、奥地の農場では墓標もなく野に埋められる。かつての宗教寺院は、形骸のみで悪人が多いので、ここには置かれないうのである。従つて中國の古い墳墓思想から、地下宮殿は万曆帝以外にも当然あり得ることといえる。

定陵の発掘は、明代の陵墓制度に対する理解を深めたが、現代中國はここに揭示して言う。

「この营造物は、封建支配者の贅沢と浪費、また人民に対する酷使と、榨取と暴虐するものである。」

(参考)

(万曆帝と我が國)

